

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④6

一念の事実

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第113回と114回がビジョンセンター東京（八重洲南口）で、115回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第111回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

徹底して真実信心に立つ

『無量寿経』に「必ず超絶して去ること得て、安養国に往生せよ。横に五悪趣を截りて、悪趣自然に閉じん」（『真宗聖典』57頁、東本願寺出版、以下『聖典』）とあります。親鸞はこれを正信偈で「獲信見敬大慶喜 即横超截五悪趣」（『聖典』205頁）とおっしゃるのです。獲得信心が成り立つなら大慶喜が与えられる。大慶喜が与えられるということは、実は、横さまに五悪趣を截るのだと。

「大慶喜」と親鸞聖人がおっしゃっていることは、死ななければ慶喜できないという話ではないはず。「化身土巻」で、念仏しているのだけれど自力だという問題を親鸞聖人は第二十願で読み込まれるわけですが、その雑心なる自力の念仏には大慶喜がないと押さえるのです。本願を信じたと言うけれど、何かもやもやして一向にたすかっていない。死んでからたすかるという話をしているから、生きている間はもやもやしていいのだと逃げているわけです。それを親鸞聖人は徹底して真実信心に立つとおっしゃるわけです。

安養国に往生して横さまに五悪趣を截ることが成り立つのは、信心という事実において成り立つのだと。真実信心に立つということは容易なことではない。しかし、親鸞聖人は真実信心に立って、そして本願念仏を仏教の極意だとおっしゃって生き抜かれたわけです。だから親鸞聖人の教えに触れようとするなら、やはりそういう親鸞聖人が為した大切な課題にどこかで我々自身も触れていきたいということがないといけないと思うのです。

前念命終後念即生

我々は相変わらずの凡夫です。にもかかわらず流転輪廻の命を截るのだと。本願力が截るので自分で截るのではない。我々は、自分で超えたり、自分で截ったりしなければいけないと思っている。それを親鸞聖人は豎形の発想だと言うわけです。自力の発想だと。本願他力を信ずるということは、横に截られることをいただくのだと。横に截られるということは、凡夫であることを止める必要はない。凡夫の生活のままに大悲の本願の光の中にあることを信ずる。矛盾しないわけですよ、凡夫の命と。

凡夫の命でありながら、五悪趣を截るとはどういうことだろうと考えたらさっぱりわからない。そういう構造をどういうふうに表示したらよいかというときに、大変難しい問題が絡む。「前念命終 後念即生」という善導大師の言葉を、「本願を信受するは、前念命終なり。即得往生は、後念即生なり」（『聖典』430頁）と親鸞は言っているのです。それを曾我量深先生は、前念と後念というけれども、前念から後念へという念自身は一念

親鸞仏教センターの動き

(2018年8月～2018年10月) 一抄出—

なのだと。二念ではない、一念の前後だと。それは、凡夫であることと光に^あ遇って五悪趣を横さまに載っていただくこととがどういう関係か言おうとすると、前念に死んで後念に生きる、妄念の自己に死んで本願の主体に生きるということは一念なのだと。前念命終後念即生が一念の事実の内容だと。「南無阿弥陀仏」の中に凡夫がそのまま往生するという事実を与えていただけるのだと。

■念々に妄念に死んで新しい命に甦る

凡夫の自我を依り処とする発想から、本願力を依り処とする、転換する。転換したら終わりではなくて、転換するという一念は常に一念なのです。往生という事実は、本願力によって成り立つ生の転換を、新しい生に生まれると表現したわけです。だから、それは念々に生まれているわけです。念々に生命が生きているが如くに、念々に妄念に死んで新しい命に^{よみが}甦るという事実がずっと続くわけです。そういうことが、親鸞聖人がいただいた、信の一念の内容としての「願生彼国、即得往生、住不退転」(『聖典』44頁)という本願成就文のいただき方ではないかと思うのです。

そこには自分というものはないわけです。自分があるやっているとわけではない。生命体の血液のはたらき一つをとっても自我がやっているわけではない。生命が生きているということは、もうどどんとにかく栄養を取り込みながら新しい自己になりつつ生きているわけでしょう。一時として止まらない。生命というものは、変わりつつ変わらない。どうしてそうなっているかと言ってみても、そういうものなのです。こんな不思議なことは生命でしか成り立たない。それを^{ひゆ}譬喩に使えば、この自我の命に死んで本願力の命に甦ることが念々に起こることは何の矛盾もないわけです。新しい自己になりつつ生きていくわけですから。なりつつと言うと、だんだんというふうに、過程的プロセスではないかと考えてしまうけれど、そうではない。一念の事実の中に宗教的な事実をいただいて生きていくということなのです。

(文責：親鸞仏教センター)

■2018年

- 8/7 第5回(通算53回)『尊号真像銘文』研究会
- 8/10 ご命日のつどい
- 8/11 東アジア人文フォーラム(北京大学):長谷川研究員発表「井上円了における進化論哲学の受容」
- 8/20 第215回英訳『教行信証』研究会
第114回(通算第165回)連続講座「親鸞思想の解明」(中央区・ビジョンセンター東京)
- 8/21 第15回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 8/27 第191回清沢満之研究会
- 8/30 第28回「『教行信証』と善導」研究会
- 9/1、2 第69回日本印度学仏教学会(東洋大学):
青柳研究員発表「智昇と三階教」、中村研究員発表「證空の末法思想—『自筆鈔』／『他筆鈔』の相違に着目して」、長谷川研究員パネル発表「大乘仏教」という言説形成—井上円了と19世紀のグローバルな宗教思潮」
- 9/8、9 第77回日本宗教学会(大谷大学):長谷川研究員パネル発表「井上円了における「哲学」概念の再考—「哲学宗」を中心にして—」、飯島研究員パネル発表「禅・華嚴と日本主義—市川白弦と紀平正美の比較分析を通して—」
- 9/13 第29回「『教行信証』と善導」研究会
- 9/14 ご命日のつどい
第16回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 9/19 第6回(通算54回)『尊号真像銘文』研究会
- 9/25 第216回英訳『教行信証』研究会
- 9/26 第192回清沢満之研究会
- 10/1 第115回(通算第166回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 10/12 ご命日のつどい
第8回「近現代『教行信証』研究」検証プロジェクト全体会
- 10/15 第30回「『教行信証』と善導」研究会
- 10/16 第60回現代と親鸞の研究会「21世紀の贈与論」立教大学客員教授:平川克美氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 10/17 第17回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 10/23 第193回清沢満之研究会
- 10/29 第217回英訳『教行信証』研究会
- 10/30 第7回(通算55回)『尊号真像銘文』研究会